

眠れ、悪しき子よ

丸山健二著

文芸春秋 上下 各1800円

評・三浦 佑之 (古代文学研究者)
立正大教授

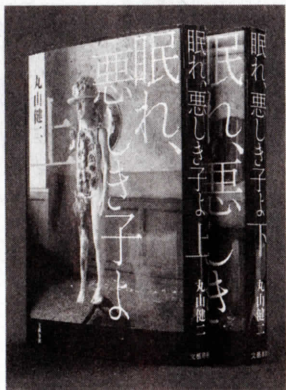
55歳で早期退社し、日本海に面した生まれ故郷を見下ろす天野村の村営住宅を終の住処に選び、買い集めていた哲学書を読みながら、自由な時間を過ごす。そう願った「私」の、自己崩壊の物語というふうにもまとめると単純すぎるか。

5戸並ぶ住宅の南端に「私」は住み、反対の端には、この上なく善良で悠々自適の老後を送る吉野さん夫妻が、まん中には「津美都生」「私」は勝手にツミトイキルと読む」という名の25歳の好青年が住み、2戸は空家だ。25年前の、別れた妻にできた子を堕胎させた負い目を消せない「私」は、イキルの年齢に敏感になる。いつしか自分の子ではないかとさえ思ってしまう。

村に移住した「私」は、自分が、教師だった父が教え子に生ませた子であることを知る。それを知ったのは、兄夫婦の厄介者となった寝たきりの母が「私」を罵倒した言葉と、糖尿病を悪化させて自殺幫助を頼んできた旧友の宣告によってだった。その事実「私」は叩きのめされ、その頃から周りにはただならぬ気配が漂いだす。

平穏なはずの「私」の近くで、消えてほしい

故郷で崩壊する自己描く



◇まるやま・けんじ＝1943年、長野県生まれ。作家。著書に『夏の流れ』『野に降る星』『猿の詩集』など。

母が、旧友が、ケンカ相手のヤクザ者が、次々に死ぬ。そこにはいつも、影のように見え隠れするイキルがいる。そしてついには、イキルの行動が「私」の行動のようにも思えてくるのだ。

どこに進むのか見当もつかなかった小説が、恐怖感たっぷりのサスペンスの様相を呈し、イキルが「ジキル(ジーキル)」という名前と重なる。とすると「私」はハイドなのか。いや、イキルはハイドで「私」がジキルか、それとも別人。

人の心の善悪について、全六百頁の一頁17行をすべて、素数の2・3・5・7行からなる4段落に揃えて埋め尽くす手法に圧倒される。文庫化を拒否して仕掛けた、著者の意図は何か。行数だけでは、住宅の戸数や殺される人数にもみられる素数の意味、イキルと「私」との関係、現実と夢想とを往き来するような語り、それらを解ききれない自分の読みがもどかしい。